

(5) 航空戦力

航空戦力は、主に海軍航空部隊及び空軍から構成される。第4世代の近代的戦闘機としては、ロシアからSu-27戦闘機、Su-30戦闘機及び最新型の第4世代戦闘機とされるSu-35戦闘機の導入などを行っている。また、国産の近代的戦闘機の開発も進めている。Su-27戦闘機を模倣したとされるJ-11B戦闘機やSu-30戦闘機を模倣したとされるJ-16戦闘機、国産のJ-10戦闘機を量産している。空母「遼寧」にも搭載されているJ-15艦載機は、ロシアのSu-33艦載機を模倣したとされる。さらに、第5世代戦闘機とされる**J-20戦闘機**の作戦部隊への配備を開始したとされており、J-31戦闘機の開発も進めている。なお、J-31戦闘機は、J-15艦載機の後継機の開発ベースとなる可能性も指摘されている。

爆撃機の近代化も継続しており、中国空軍は、核弾頭対応とされる長射程の対地巡航ミサイルを搭載可能とされる**H-6爆撃機**の保有数を増加させている。さらに、爆撃機の長距離運用能力の向上を図っており、空中給油により長距離飛行が可能なH-6N爆撃機の運用を開始したとされるほか、H-20とも呼称される新型の長距離ステルス爆撃機を開発中とされており、こうした爆撃機に搭載可能な核兵器対応の空中発射型弾道ミサイルの開発も指摘されている。また、ステルス戦闘爆撃機の開発も指摘されている。

このほか、H-6U及びIL-78M空中給油機やKJ-500及びKJ-2000早期警戒管制機などの導入により、近代的な航空戦力の運用に必要な能力を向上させる努力も継続している。また、16(平成28)年7月以降、独自開発したY-20大型輸送機

の配備を進めているが、同輸送機は空中給油機などの開発ベースにもなっているとの指摘がなされている。

さらに、偵察などを目的に高高度において長時間滞空可能な機体(HALE)や、ミサイルなどを搭載可能な機体を含む多種多様な無人航空機(UAV)の自国開発も急速に進めており、その一部については配備や積極的な輸出も行っている。実際に、空軍には攻撃を任務とする無人機部隊の創設が指摘されているほか、周辺海空域などで偵察などの目的のためにUAVを頻繁に投入している。なお、19(令和元)年10月の建国70周年軍事パレードにおいては、攻撃型ステルス無人機とされるGJ-11と呼称される機体や高高度高速無人偵察機とされるWZ-8と呼称される機体が初めて展示された。中国国内では低コストの小型UAVを多数使用して運用する「スウォーム(群れ)」技術の



中国建国70周年祝賀軍事パレードで展示されたGJ-11無人機 (19(令和元)年10月)【Avalon/時事通信フォト】

J-20 戦闘機

諸元、性能

最大速度：時速3,063km

概説

ステルス性を有する第5世代戦闘機。18(平成30)年2月、作戦部隊へのJ-20の引き渡しが開始された旨、中国国防部が発表。



H-6 爆撃機

諸元、性能

最大速度：時速1,015km
 主要兵装(H-6K)：空対地巡航ミサイル(最大射程1,500km)

概説

国産爆撃機。H-6爆撃機は、核弾頭を搭載できる巡航ミサイル(CJ-20)を搭載することが可能



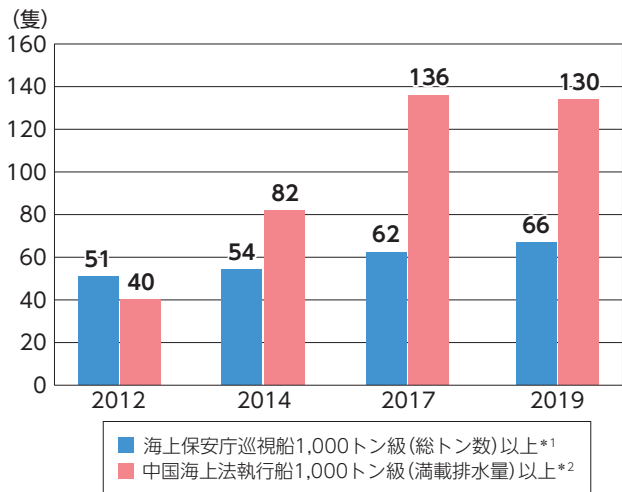
向上も指摘されている。

このような航空戦力の近代化状況などから、中国は、国土の防空能力の向上に加えて、より遠方での戦闘及び陸上・海上戦力の支援が可能な能力

の向上を着実に進めていると考えられる。

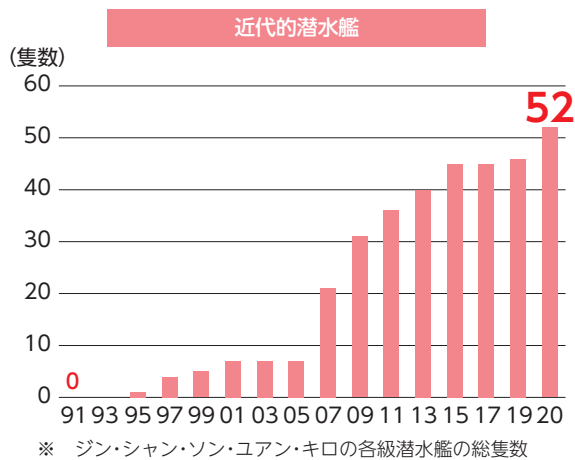
【参照】 図表 I -2-2-6 (中国公船の勢力増強)
図表 I -2-2-7 (中国の主な海上・航空戦力)

図表 I -2-2-6 中国公船の勢力増強

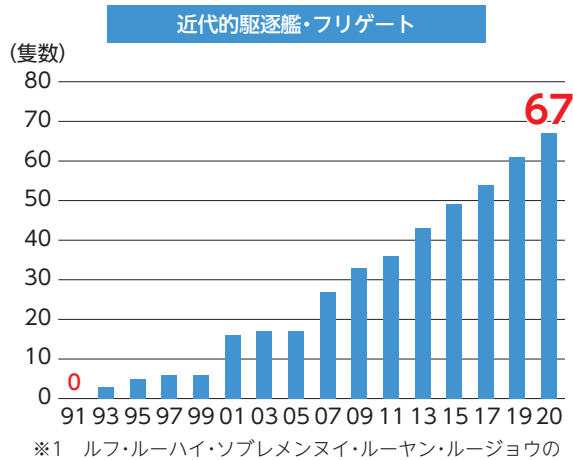


*1 令和元年度末の隻数
*2 令和元年12月末現在の隻数 公開情報を基に推定(今後、変動の可能性あり)
※ 海上保安庁「海上保安レポート2020」による

図表 I -2-2-7 中国の主な海上・航空戦力



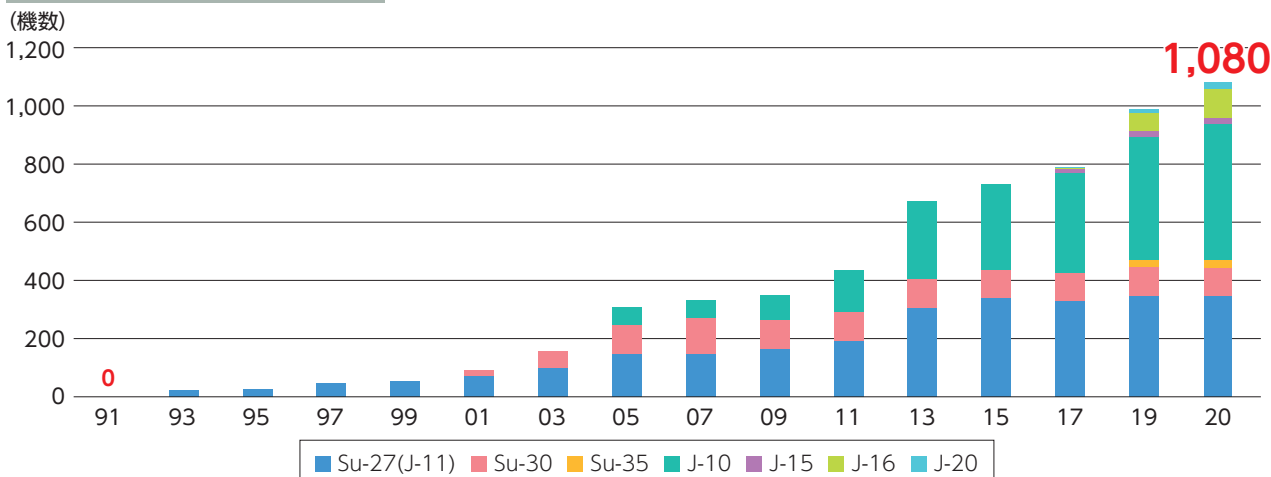
※ ジン・シャン・ソン・ユアン・キロの各級潜水艦の総隻数



※1 ルフ・ルーハイ・ソブレメンヌイ・ルーヤン・ルージュウの各級駆逐艦及びジャンウェイ・ジャンカイの各級フリゲートの総隻数

※2 このほか、中国は42隻(20年)のジャンダオ級小型フリゲートを保有

第4・第5世代戦闘機



■ Su-27(J-11) ■ Su-30 ■ Su-35 ■ J-10 ■ J-15 ■ J-16 ■ J-20